

---

# 名探偵アスカ

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵アスカ

### 【Nコード】

N 6 6 8 5 A

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

主人公である高校生探偵の宮部拓也<sup>みやべたくや</sup>は、ある日を境に売れっ子アイドルの木之本アスカと入れ替わってしまう。そして・・・。

## アスカについて

俺は・・・いや、私はアスカ。

俺は・・・じゃなかった。

私、木之本アスカは今や人気の売れっ子アイドル。  
でも、それは昨日までの事だった。

今日は、昨日の事をしよう・・・。

## チェンジ

この俺こと、高校生探偵の宮部 拓也は、学校帰りにある坂道を下っていた。

すると、どこからともなく。

????：「きゃー、どいてどいてー！」

と、自転車に乗った女の子が俺の方へ向かって来た・・・。  
いや、向かって来てるのでは無い。

自転車のブレーキが言う事を効かず、コントロール不能になっていたのだ。

危ねえじゃん!?

俺は、避けようと思ったが、足がすくんで動けなかった。

そして、とうとうぶつかってしまった。

その衝撃により、俺の身体は坂道をころころと転がって行き、平らになった所でやっと止まった。

女の子の方が、自転車から放り出されて俺の横で倒れていた。

また、自転車は坂の途中で倒れて止まっていた。

俺は、女の子に声を掛けた。

拓也：「お前、大丈夫か？」

すると、女の子は起きあがり。

????：「大丈夫です！」

それより貴方の方が!？」

と言った。

良く見ると、女の子は加地千尋に似て可愛かった。

????：「あ、怪我をしています！」

女の子は、俺の腕を見てそう言った。

拓也：「こんなの平気、ただのかすり傷だ。」

????：「駄目です！」

ちゃんと消毒をしなくては、ばい菌が入ってしまいます！」

何だこの子。

かなりしつかりしてるじゃないか。

女の子は、処置をしながら自己紹介をした。

アスカ：「私、木之本 アスカと申します。

あの、貴方は？」

木之本 アスカ・・・。

そうか、この子、何処かで見たと思ったら、今や人気の売れっ子アイドルの木之本 アスカちゃんか。  
おっと、自己紹介を忘れる所だった。

拓也：「俺、宮部 拓也。」

アスカ：「宮部 拓也さん・・・。

何処かで聞いた事のあるお名前ですね。」

そりゃそうだろうな。

俺は今やの人気の高校生探偵だからな。

って、アスカちゃんは俺の正体に気付いて無いのか？

拓也：「あの、俺の事ご存知無いんですか？」

アスカ：「存じ上げておりませんが、何処かで会った事ありますか？」

いやいやいや、会ったとかそう言うんじゃない、同じ有名人でしようが。

アスカ：「ああ、思い出しました。

高校生探偵の宮部 拓也さんですよね。

最近ニユースで取り上げられているから気になってたんですね。」

一体何が気になってるのか解らない・・・。

アスカ：「あの、宜しかったら私とお友達になってくれませんか？いきなりそれかい？」

アスカ：「あの、私の様なお方では駄目でしょうか？」

拓也：「いや、そんな事無いよ。

俺も君のファンだし、出来る物なら友達になりと思ってたよ。」

アスカ：「じゃあ、今日からあたしと貴方はお友達ね。」

それと、あたしの事・・・アスカって呼んでくれて良いからね。」  
と言う訳で、俺はアスカとお友達になった。

拓也：「自転車、壊れちゃったね。」

アスカ：「そうだ、自転車!？」

さつき、ドラマの撮影が終わって、帰ろうとしてあの自転車に乗ったんですけど、何かブレーキが効かなくなっていて・・・。」

拓也：「効かなくなってたって何時から？」

アスカ：「収録が始まる前はブレーキ効いたから、収録中が終わった頃に効かなくなったのかも・・・。」

俺は、自転車のブレーキを見た。

すると、ブレーキが効く以前に、ブレーキコードが切断されていた。これでは効く筈が無い。

しかも、この切断面は自然の物では無く、明らかに人為的な物だった。

拓也：「アスカ・・・これは誰かの悪戯いたずらだよ。」

アスカ：「悪戯ですか？」

一体誰がこんな事を？」

俺は、さあなと言って立ち上がろうとした。  
すると、俺の身体は後に倒れかかった。

正直やばいと思った。

その時、アスカは俺を支えてくれた・・・。

しかし、アスカの力では支えきれず、俺とアスカは坂道をそのまま転がり落ちた・・・。

そして、平らな所まで来ると、ようやく止まった。

アスカ：「いててて・・・。」

アスカ、大丈夫か？」

俺はアスカに呼びかけた。

しかし、アスカの声は無かった。

いや、それ以前に声は何だか可笑的い。

俺は、もう一度声を出してみた。

すると、そこから出たのは俺の声では無く、アスカの声だった。  
俺は次に身体を確かめた。

アスカ：「な、無い！？

俺の が無いぞ！」

どうやら俺はアスカと入れ替わってしまった様だ。

俺はそう悟った。

すると、近くに水嶋 ヒロ似の男が倒れている事が解った。

恐らく、あれがアスカの入っている俺の身体だろう。

俺は兎に角俺に・・・いや、アスカの入ってる俺に声を掛けた。

アスカ：「おい、大丈夫か？」

すると、俺の身体は目を開けた。

そして、その口から出たのは女言葉を使う俺の声だった。

拓也：「痛かったわ・・・え？」

キモイ。

男の声で女言葉なんてキモイ。

俺はそう思った。

だが、今はそんな事を言ってる時じゃない。

拓也：「これってどういう事？」

俺はアスカに、坂から転がり落ちた時に二人の身体が入れ替わったと説明した。

だって、どう見たってそうとしか考えれないだろ。

拓也：「あたしの身体返して下さい！」

そう言って俺の身体に入ったアスカはアスカの身体に入った俺を掴んで来た。

アスカ：「いてっ、痛いってアスカ、取り敢えず落ち着け！」

するとアスカは力を抜き。

拓也：「御免・・・。」

あたし、どうかしてた。」

と言った。

とは言った物の、どうやって戻れるのか？

俺達はそればかり考えていた。

一説によると、同じ事をやれば戻れるとか、頭と頭をぶつければ元に戻るとか、色々あった。

俺達は、色々試したが、結局どれも無駄だった。

これからどうすれば良いのだろうか？



## 撮影

翌日の土曜日。

今日は学校が休みだったので何とか助かった。

俺は、アスカと近くの公園で待ち合わせをしていた。  
って、やばい！

もう待ち合わせの時間過ぎてる！

俺は急いで自宅（アスカの家）を飛び出した。

そして、向かった先は待ち合わせの約束をしている公園。  
公園に着くと、既にアスカがベンチに腰を掛けていた。

アスカ：「御免、遅くなった・・・。」

拓也：「良いの良いの、俺も今来た所だから。」

おっ、すっかり男になりきってるな。

それもそうだ。

昨日、帰り際に俺たちはその性別に合った言葉遣いをしようと約束したからだ。

でないと、他人が見たら変に思われるでしょ。

プルル、プルル、プルル。

アスカの携帯が鳴っている。

拓也：「どうして出ないの？」

あ、そうか・・・。

俺は今、アスカなんだっけ。

俺は、携帯の通話ボタンを押して電話に応答した。

アスカ：「はい、木之本です。」

マネージャー：『アスカちゃん、おはよう。』

今日も偵探公園で収録あるけど都合とか大丈夫？』

収録だと？

聞いて無いぞ俺は？

って、偵探公園って今いる公園じゃん！？

拓也：「どうした？」

アスカ：「今日、此处で収録があるみたいだよ。今、マネージャーから聞いた。」

俺は、アスカに言った。

拓也：「じゃあ代わりに出てよ。」

軽々しく言うな！

って、俺は今アスカなんだし、しょうがないか……。

俺は仕方なくマネージャーに大丈夫とだけ言って電話を切った。それから30分くらい経っただろうか……。

テレビ局のスタッフ達が集まって来た。

マネージャー：「アスカちゃん、早いお着きで。」

すると、アスカ入りの俺は耳元で小さく。

拓也：「マネージャーの椎名 武雄さんだよ。」

椎名さんって呼んで。」

と言った。

アスカ：「椎名さん、おはよう御座います。」

それで、今日はどんなシーンの撮影を？」

しかし、椎名は黙っていた……。

アスカ：「どうかしたんですか？」

武雄：「実は、聞いて欲しい事があるんだ……。」

アスカ：「聞いて欲しい事……ですか？」

武雄：「驚かないで聞いて欲しい。」

実は、今日の撮影に来る事になっていた、相手役の黒田 裕也君が

何者かに殺されたらしい……。」

黒田 裕也……あの、少年俳優の事か？

アイツ、俺の友人なんだよな……。

そんなアイツが、何者かに殺されたのか……。

武雄：「そこで、急遽役を捜しているんだが、なかなか見つからなくてね。」

アスカちゃん、誰か心当たり無い？」

俺は、横に座っているアスカ入りの俺を指名した。

アスカ：「この方でも宜しいですか？」

すると、アスカ入りの俺は驚いて言った。

拓也：「な、何で俺が！？」

武雄：「アスカちゃん、この人・・・どちらさん？」

アスカ：「探偵の宮部 拓也君です。」

武雄：「た、探偵！？」

な、何で名探偵の宮部君が？」

アスカ：「色々事情があるんですよ。」

と、兎に角、私は彼を推薦します。」

武雄：「アスカちゃんがそう言うならそれでも良いよ。」

それに、黒田君の事もあるしね。

それじゃあ早速撮影を始めるよ。

宮部君、いきなり本番だけど大丈夫？」

拓也：「多分、大丈夫だと思います。」

取り敢えず、台本を貸して貰えますか？

急いで覚えますから。」

武雄：「ああ、そうだったね。」

と、椎名は台本を取りだしてアスカに渡した。

アスカは台本を黙読し、台本を閉じた。

武雄：「もう良いのかな？」

拓也：「はい、バッチリ覚えました。」

そう言う訳で、撮影が開始された。

俺は、一人ベンチに座って涙を流していた・・・。

何故なら、此処は泣くシーンだったからだ。

すると、一人の男が通りかかった。

見た目が俺のアスカだった。

拓也：「どうしたんだい？」

俺は、涙を流しながら。

アスカ：「彼に、大好きだった彼にフラれちゃったの・・・。」

と、迫真の演技をする。

拓也：「そうか・・・。」

良かったら僕が話を聞いてあげるよ。」

そこで、監督が「カーツ」と叫んだ。

監督：「いやー、NG無しで素晴らしかったよ。」

次回もこの調子で頑張ってくれ賜え。」

監督は笑顔でそう言った。

そして、俺たちは次の舞台である、レストランマミーに向かった。

## レストラン殺人事件！

俺たちは、次の撮影場所であるレストランマミーに来ていた。  
そして、撮影が始まる・・・。

始まると同時に番組の撮影に協力している現場のウェイトレスが来て言った。

ウェイトレス：「ご注文はお決まりでしょうか？」

俺たちは、台本の通りに食事を注文した。

腹なんて減って無いのになあ・・・。

ウェイトレス：「かしこまりました、少々お待ち下さい。」

と言って、ウェイトレスはその場を立ち去った。

すると、後で食べていた別の女性出演者が水を飲むと急に立ち上が

って喉を押さえて苦しみだしてその場に倒れた。

そう、何を隠そうと、これは名探偵・里菜めいたんてい・りなの撮影なのだ。

だから、何も可笑しくない。

出演者は台本通りに演技しただけなのだ。

俺は、そう思った。

因みに、主人公の里菜は俺だ。

俺は、迫真の演技で倒れた出演者に近付いた。

そして、俺は脈を調べた。

とは言っても、調べる振りだけど。

ん、何だこの甘酸っぱい臭いは！？

これって、青酸カリだよな？

いくら撮影だからってやり過ぎじゃないのか？

俺は変だと思い、脈をもう一度計った。

すると、脈が止まっていた。

え、止まっている！？

待て待て、コイツ・・・本当に死んでんじゃないのか！？

俺は無意識の内に。

アスカ：「し、死んでる・・・。」

コイツは演技じゃない、本当に死んでるんだ！」  
と言った。

監督：「カットカット！」

撮影中止だ！」

監督は撮影を中断させた。

しかし、一人だけ撮影を中止しないカメラマンがいたが、誰もそれに気付いて無かった。

アスカ：「椎名さん、警察を！？」

武雄：「はい！」

椎名は、警察に電話をした・・・。

俺は、警察が来る前に出来るだけの事をした。

10円玉を取りだし、コップの中の水に10円玉を入れた。

すると、10円玉はみるみる内にピカピカの綺麗な10円玉になった。

アスカ：「このコップ、青酸カリが入ってますよ・・・。」

監督：「な、何だつてえ！？」

それより、どうしてそんな事が？」

アスカ：「青酸カリ・・・別名シアン化カリウムは、銅のサビを落とす性質があるんです。」

これは、シアン化カリウムがサビと科学反応を起こし、サビを分解する為に起こる現象です。

そして、このシアン化カリウムが口を通して胃に入ると、胃酸と反応してシアン化水素（シアン化ガス）が発生し呼吸困難、呼吸停止、意識喪失などをおこし、大量のときは1〜15分で死に至る危険な毒薬・・・。

恐らく、彼女はこれを飲んで死んだのでしょう・・・。」

それから暫くすると、警察が来て現場検証を始めた。

すると、一人の刑事が凄いけんまくで叫んだ。

刑事：「何でコップの水の中に10円玉が入ってるんだ！？」

と言つか誰が入れたんだね!？」

監督：「それは、そこにいるアスカ君です。」

刑事：「アスカ？」

誰だ、それは？」

アスカ：「あの、アスカは私ですけど？」

俺は素直に答えた。

ん、良く見ればこの人は、捜査一課の狩屋刑事では無かろうか。

狩屋刑事：「コップの中の水に10円玉を入れたのは君か？」

アスカ：「ええ、被害者が水を飲んで倒れたので、その中に青酸力  
リが入ってるのではと思って。」

そしたら、10円玉がピカピカになったので入っていると云う事が解  
りました。」

狩屋刑事：「少し怪しいな・・・。」

貴様、ちよつと署まで来い！」

すると、見た目は俺のアスカが言った。

拓也：「ちよつと待って下さい。」

狩屋刑事：「ん、宮部君では無いかね。」

何で君がこんな所に？」

ふう。

ありがとな、アスカ・・・。

拓也：「撮影ですよ。」

亡くなった黒田 裕也の代役で・・・。」

狩屋刑事：「何だ、黒田の件・・・もう知ってたのか？」

狩屋は、そう言いながらアスカと何処かへ行ってしまった。

ああ、元の身体だったらな・・・。

## アリバイ

暫くすると、狩屋刑事が何かごちゃごちゃ言いながら戻って来た。

狩屋刑事：「今日の宮部君、何か変だ・・・」

何処か何時もと違う。」

やべえよ、俺の事言ってるよ。

これはバレるのも時間の問題だな・・・

俺はそう思った。

狩屋刑事：「それでは、事情聴取を行います。

皆さん、一人一人順番に受けて貰いますので、呼ばれた方からお願いします。

それじゃあ、その一番怪しい木之本 アスカ！

お前が最初だ！」

俺かよ！？

俺は仕方なく事情聴取を最初に受けた。

狩屋刑事：「亡くなったのは、明丹高校に通う桐山 きりやま 葉子 よっこ。」

君も知ってるね。」

桐山 葉子か・・・

コイツも黒田と一緒に俺の友人なんだよなあ・・・

しかも俺と同じ学校だし。

狩屋刑事：「マネージャーさんの話では、君たちはライバルで1、2を争う仲だったそうだな。

被害者が邪魔になったもんで、あんたが殺したんじゃないのか？」

ふ、不利だ！

いきなり不利な展開になったぞ！

アスカ：「あたしは殺してなんかいませんよ。」

狩屋刑事：「でも、動機はあるんだよね？」

殺したい程邪魔だったんだよね？」

な、何だよ狩屋刑事・・・



あんたは俺をどうしても署に入れたいとも言っているのか？  
そりゃそうだろうな・・・。

薬物には詳しくったし、被害者の死因も解ってたし・・・。  
けどな、状況だけで犯人と決めつけてはいけませんぜ。

俺は答えた。

アス力：「動機なんか、ありませんよ。」

それに、殺したいとも思っていなかったし・・・。

狩屋刑事、貴方は私をどうしても牢屋にぶち込みたいみたいですね。  
宮部君が変だからその腹いせですか？」

狩屋刑事：「待て、何故私の名を！？」

アス力：「先ほど、小耳い挟んだんですよ。」

兎に角、私ではありません！」

狩屋刑事：「ふん、その内ボロが出るだろう。」

また呼ぶからそれまで待つてろ。」

狩屋刑事は俺を追い出した。

俺は、追い出される寸前に愛用の探偵グッズである盗聴器を椅子の裏に仕掛けた。

狩屋刑事は、そんな事にも気付かず俺を追い出し、次の人物を入れたのだ。

次の人物は、被害者の正面に座っていた男だ。

男は、青山 あおやま 哲夫 ていお。

青山は、被害者が水を飲んだら急に喉を押さえて倒れたと言った。  
しかも、それは台本の通りだったから驚 おどろ かなかったそうだ。

因みに、青山は現在付き合っている女性がいる。

狩屋刑事は、監督の館山 たてやま 総一郎 そういちろう を呼んだ。

館山は、監督椅子に座っており、被害者には一度も近付いていない。  
更に、監督は面白い事を言った。

なんと、アス力の自転車のブレーキコードを切断したのが被害者だ  
と言ったのだ。

え、アイツが？

なんて奴だ。

しかも、その事はアスカを除いて関係者全員が知っていた。

次に、アスカのマネージャーの椎名 武雄が呼ばれた。

椎名は、事件が起こる少し前に撮影の準備をしていた。

因みに、被害者の水を用意したのもこいつだ。

しかし、椎名は殺してなんかいないと言い張った。

次に呼ばれたのは、被害者のマネージャーの小島 国男こしまくにゅうだ。

小島は、被害者とは余り仲が良くはなかったそうだった。

また、小島はアスカとは仲が良かったそうだった。

次の参考人は、脇役の武山 明美たけやまあけみ。

武山は、被害者の桐山 葉子とアスカの次に人気のある売れっ子アイドルだ。

しかも、アスカとは超が付く仲良しである。

事件のあった時、彼女は撮影の準備の手伝いをしていたと言う。

更に、青山と交際していると言う事が解った。

今の所、容疑者は俺を含めて6人だ。

最後に俺がまた呼ばれた。

二度目の事情聴取だ。

狩屋刑事：「木之本 アスカ、お前は自転車のブレーキコード切断

されたと言う事だが、その事で被害者を殺害したんじゃないのか？」

確かに、それなら殺害する事もあり得るかもしれない。

しかし、アスカは被害者がブレーキコードを切断した事を知らない。

彼女が殺す筈が無い。

俺は、そんな事では殺さないし、ブレーキコードを切断されていた

事なんて知らなかったと答えた。

狩屋刑事：「本当に知らなかったんだな。」

アスカ：「はい、知らなかったです。」

狩屋刑事は、うなずくと俺を解放した。

## 桐山 葉子殺害の動機

事情聴取から解放された俺は、アスカと話をしていた……。

アスカ：「全く、酷い目に遭った……。」

拓也：「どんだけ酷かったの？」

アスカ：「酷いも何も、容疑者扱い。」

かなり不利な状況だったよ。

まだ少し疑われてるけどね。」

と、そんな話を話していると、どこからか妙な話し声が聞こえて来た。

それは、監督の館山 総一郎と武山 明美だった。

明美：「お爺ちゃん、ちゃんと警察に行こう？」

それで自首しようよ？」

自首？

何の事だ？

総一郎：「わしがいなくなったら誰が監督を務める？」

それに、アイツがいなくなったらおかげでお前も……。」

明美：「そんな事言わないで、私も一緒に行つてあげるから。」

それに、私だつてある意味共犯なんだし……ね？」

アイツ……一体、何の話だ？

それに共犯つて？

その時だった、一人の刑事が捜査資料を俺の目の前に落として行った……。

俺は、その資料に目を通した。

良く見ると、それは捜査資料では無く、人気タレントの出ている番組の瞬間最高視聴率のリストだった。

リストには、こう書かれていた。

木之本 アスカ 100%

桐山 葉子 100%

武山 明美 50%

以後、ズラーツと並んでいた。

アスカ：「こ、これは!？」

拓也：「どうしたの？」

アスカ：「人気タレントの出ている番組の瞬間最高視聴率リストさ。」

俺は、アスカにそれを見せた。

それを見たアスカは。

拓也：「ふーん。」

と鼻鳴らした。

あれ、そう言えばさっきの事情聴取で、アスカや桐山さんより視聴率が低いって武山さん言ってたっけ。

それに、武山さん・・・青山さんと付き合ってるって・・・。

アスカ：「そうか、そうだったのか！」

俺は思わずそう叫んだ。

拓也：「どうしたの？」

と、見た目が俺のアスカは言う。

アスカ：「桐山 葉子殺害の動機と犯人が解ったんだ・・・。

だけど・・・まだ証拠が無い・・・。

待てよ、武山さん・・・アスカと仲良しだって言ってたな・・・。

って事は!？」

拓也：「今度は何？」

アスカ：「証拠があつたんだ。

あの人が犯人だと言う確実な証拠がな・・・。

それはそうと、監督が言ってたアイツって・・・。」

拓也：「黒田君の事・・・監督、黒田君の事を陰ではアイツって言うってたよ。」

アスカ：「そんなまさか。」

拓也：「そのまさか。」

監督がアイツって言うのは黒田君しか無いもん。」

黒田しかいない・・・。

はっ、解ったぞ！

黒田を殺害した犯人が！

間違い無い、黒田を殺害したのは監督だ！

後は皆に黒田殺害犯の監督と桐山 葉子殺害の犯人の事を話すだけだ・・・。

## 事件の真相

俺こと、アス力は犯人が解つたので、皆を集めて推理ショーを始める事にした。

狩屋刑事：「真犯人が解つたって本当か？」

本当ならそれは大したもんだよ。」

武雄：「アス力ちゃん、犯人は誰なの？」

俺は、これから話す事は番組生命に掛かる事だから覚悟して聞いて欲しいと言った。

総一郎：「番組生命が掛かってるだど？」

ばかばかしい。」

アス力：「監督、ばかばかしいかどうかは聞いてからにして下さい。さて、狩屋刑事。」

狩屋刑事：「何だ？」

アス力：「黒田さんの事件について詳しく話して下さい。」

狩屋刑事：「黒田の件？」

何でまた？」

アス力：「それは、黒田さんを殺害した犯人がこの中にいるからです。」

それと、桐山 葉子を殺害した犯人もこの中にいる！」

すると、皆が驚いた・・・。

狩屋刑事：「黒田 裕也・・・。」

彼は木之本 アス力・・・あんたが主演の名探偵・里菜の相手役だった子だ。

そんな彼が、つい最近、何者かに首を絞められて殺害された。

現場は偵探高校付近の土手で、そこには犯人の物と思われる物は一つも無かった。

ただ一つ、気になるのはこの手紙だ。」

狩屋刑事は手紙を出した。

手紙にはこう書かれていた。

『黒田 裕也様。

私は貴方が好きです。

偵探高校付近の土手で待っています。

by A・T』

ラブレターか・・・。

証拠としては充分だな。

ん、T・A？

T・Aって言ったら、武山 明美だよな・・・。

あ、あの時に言ってた共犯ってこの事だったのか！

更に、警察の調べで黒田 裕也は武山の事が好きでしつこく言い寄っていたと言う事が解った。

アスカ：「黒田 裕也を手紙で現場に呼び出したのは、明美さん・・・貴方ですね。」

明美：「な、何言ってるのアスカ？

私には青山君って言う彼氏がいるのよ？

彼氏がいるのに何で黒田君に好きって言う訳？」

アスカ：「いや、貴方が黒田 裕也にラブレターを出したのは好きだからじゃない・・・。

貴方が呼び出したのは、黒田 裕也を殺害する為・・・そうなんですよ？」

明美：「ま、待ってよアスカ。

私は、黒田君なんか殺してないわよ？」

アスカ：「・・・実行したのは貴方じゃないわ。

監督の館山 総一郎・・・貴方です！」

総一郎：「ばかばかしい！

何処にそんな証拠が・・・。」

アスカ：「証拠はありませんが、動機ならあります。

監督、貴方は明美のお爺さんなんじゃないんですか？

先ほど、あなた達の会話・・・聞かせて貰いました。

貴方がアイツと言うのは、黒田 裕也・・・彼だけだった。だから、貴方は黒田 裕也をアイツって言っていたんです。その他にも、自首だとか、共犯だとか色々聞こえましたよ。監督・・・全部話して頂けませんか？」

すると、監督はその場に膝を付いた。

総一郎：「アイツが悪いんだ。

アイツが孫娘の明美にしつこく言い寄るから・・・。

だから、わしは明美と協力して彼を殺害したんだ・・・。」

監督は、そう言っただけ黙ったままだった・・・。

明美：「お爺ちゃん・・・。」

武山も監督の隣でしゃがんで何も言わなくなってしまった。

狩屋刑事：「これで、黒田の件は解決だな・・・。」

次は桐山 葉子殺害の犯人だな。」

その通りだ。

俺は、思った事全てを言う。

アスカ：「桐山さん殺害事件の犯人・・・。

これは恐らく、怨恨・・・。

いや、厳密に言えば明美の為でしょう。

先ほどの事情聴取で、被害者が私の自転車のブレーキコードを切断したと言う話が出てましたが、それが動機で間違いありません。」

狩屋刑事：「ちょっと待て。

武山の為で動機が君の自転車か？

動機が矛盾してないか？」

確かに、一見すると矛盾しているかのように見えるが、実はそうでは無いのだ。

武山は、アスカとは超が付く仲良し。

そして、武山は青山と交際している。

つまり、青山さんなら武山の為に被害者に毒を盛る事も考えられるのだ。

アスカ：「青山 哲夫さん、犯人は・・・貴方です。」



哲夫：「ま、待ってくれよ。」

何で僕が葉子君を殺さなくてはいけないんだい？

もし、仮に僕が犯人なら動機は何だい？」

アスカ：「動機は、二つあります。」

一つは、最初に言った私の自転車・・・もう一つは、この瞬間視聴者リストです。」

俺は瞬間視聴者リストを取りだして見せた。

そこには、こうある。

木之本 アスカ 100%

桐山 葉子 100%

武山 明美 50%

どう見たって全体的に低いと思う。

だから、青山は桐山さえ削れば武山が上つてくると考えたんだろう。

哲夫：「そ、それなら毒はどうやって入れたんだい？」

アスカ：「氷ですよ。」

貴方は氷に青酸カリを混入させ、こっそり被害者のコップに氷を入れたんです。

勿論、最初に準備されていた水には氷が入っていた。

青酸カリ入りの氷を入れて数が増えても余り目立たないし誰も怪しまない。

貴方はそのやり方で被害者に毒を盛ったんだ！」

すると、青山は膝を付いて全ての罪を認めた・・・。

哲夫：「俺、明美から聞いたんだ・・・。」

『桐山 葉子にアスカの自転車のブレーキを壊された』って・・・。  
だから俺は、葉子君に毒を盛ったんだ・・・。」

青山さん・・・。

あんだ、良い人だよ・・・違った意味で。

その後・・・（前書き）

随分適當です。

まあ、メインは事件とその解決編だけなんで悪しからず。

その後・・・

その後、事件は解決し、青山、武山、監督の館山は逮捕された。そして、俺はアスカと前より仲良くなっていた・・・。

今では、身体は入れ替わってはいるが、一緒に遊んだり、デートしたりと色々楽しくやっている・・・。

拓也：「おい、拓也くん。」

と、俺を呼ぶアスカの声が聞こえた。

俺は、声のした方を向き。

アスカ：「おう、アスカじゃねえか。」

と言り返した。

これから先、俺らはどうなるのやら・・・。

何時になったら戻れるのやら・・・。

俺らはそればかりかを考えていた。

だけど、今はそんな事を考えていても仕方がない。

と言う訳で、俺は今日も一日、楽しく過ごしたのだ。

アスカ：「アスカ、明日は映画でも見に行こうか。」

拓也：「何の映画？」

アスカ：「I love detective っていうラブストー

リーだよ。」

今、話題の映画なんだ。」

拓也：「それ、見たい。」

と言う訳で、俺たちは映画を見に行く約束をしたのだ・・・。

そして、俺らはそれぞれの帰路に着いた。

家に帰ると、アスカの母さんが出迎えてくれた。

母さん：「アスカ、夕刊見たわ。」

本物の事件を解いちゃうなんて、凄い活躍ね！

お母さん、見直しちゃったわよ。」

アスカの母さんはそう言った。

コイツ、どんな育てかたしてんだ？

母さん：「そんな事より、早くお風呂に入っちゃいなさい。

お湯沸いてるから。」

風呂だな・・・え、風呂？

ちょ、ちよつと待て！？

昨日はそのまま寝ちまったから良かったけど、今日は入らなくちゃいけないのかよ！？

大体、俺は男だ！

女の子の体で風呂に入るなんて、そんな事出来やしない。

どないすれば良いねん！？

母さん：「アスカ、昨日は入ってないんだから、今日は入りなさい。良いわね？」

と言って、去って行った。

どうしても入らなくてはいけないのか。

と言う訳で、俺は風呂に入ったんだが、かなり恥ずかしかった・・・。

明日はアスカと映画だな・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6685a/>

---

名探偵アスカ

2010年10月9日16時10分発行